

動物園・水族館での教育を考える シンポジウム・ワークショップ 報告書



社団法人 日本動物園水族館協会 教育事業推進委員会
文部科学省「動物園・水族館における学習方法・実践・普及に関する調査研究」委託事業

シンポジウム・ワークショップ報告書の発行にあたって

日本動物園水族館協会では、文部科学省の委託を受けて、「動物園・水族館における学習方法・実践・普及に関する調査研究」をテーマに、組織内に教育事業推進委員会及び調査研究委員会を設けて、平成 14 年度の調査研究を進めてまいりました。この調査研究は、平成 12 年度に行った「教育プログラムの実態調査」、平成 13 年度の「新しいプログラムの開発」という経過をふまえて、その実績の上に、実際に運用していくための調査・研究活動でした。

動物園・水族館（以下、園館）が、教育活動を実施する機関であるという認識がされて以来、はや数十年になろうとしています。日本における活動は先進的なものとは言えない状況でした。しかし、この数年の間に園館の内外から園館における教育活動の必要性が主張され、学校教育において平成 14 年度に本格実施となった「総合的な学習の時間」の中に、博物館等の利用促進がうたわれるなど、教育活動にかかる気運は盛り上がり、本協会も本格的に教育推進事業に取り組み始めました。今回のシンポジウムとワークショップは、それらの動きを象徴するものとしても大変意義深いと考えられます。

過去 2 年間の事業がもっぱら研究活動の領域であったのに対して、今年度の事業は実際に園館の現場でモデル的な教育活動を実施し、反省したことに重要な意義があります。また、学校教員や市民と協同して実施した点においても画期的であるといえます。開発したプログラムを、多数の園館職員の参加のもと実際に試行し、そこで得られた智恵・ノウハウそして実施にたどり着くまでの経過を体験してみることは、職員にとっても大きな糧となったと自負しています。

シンポジウムでも、「園館で教育活動を行うにあたってどのような基本的な認識が必要か」という課題にあわせて、園館における実践活動の経験を活かした報告・討論がなされました。

今回の活動報告は、シンポジウムやワークショップに参加できなかった皆さまにこれらの活動をできるだけ生々しくお伝えして、今後、各園館で活動を行うにあたっての参考にさせていただくことを目的として作成いたしました。また、よりわかりやすくするために、ワークショップについてはビデオテープによる報告集も作成いたしましたので、ご利用ください。

本報告書が、日本における園館での教育活動の飛躍的な向上にお役に立てることを願ってやみません。

2003 年 3 月

日本動物園水族館協会 教育事業推進委員会
委員長 石田 おさむ

目次

シンポジウム・ワークショップ報告書の発行にあたって

目次

ワークショップの記録	1
ワークショップの実施について	3
ワークショップの様子	5
福岡ワークショップ	13
広島ワークショップ	19
大阪ワークショップ	25
東京ワークショップ	31
シンポジウムの記録	37
シンポジウムの開催にあたって / 石田 おさむ	39
子どもの発達に応じた学習 / 無藤 隆	41
学校からみた動物園・水族館 / 石井 雅幸	53
水族館でのメッセージ / 佐藤 哲	61
動物園での学校向けプログラム / 草野 晴美	71
パネルディスカッション	80
教育事業推進委員会の記録	97
おわりに	

ワークショップの記録

ワークショップの実施について / 加藤 由子

昨年度（平成 13 年度）の調査研究で、新しい教育モデルプログラムを開発した。これは平成 12 年度の「教育プログラム共有化のための調査研究」で行われた実態調査をもとに、「総合的な学習の時間」への対応や、より多くの一般来園者を対象とできるような工夫を取り入れて、さまざまな切り口のプログラムをモデルとして提案したものであった。すでに実施されているプログラムに普遍性をもたせて再編成したものや、全く新しく開発したものなど 13 種のプログラムを作成、それぞれについて、ねらいや達成目標、実施対象、効果、所要時間、所要人数、準備するもの、手順などをマニュアル化して一覧にまとめ、動物園・水族館（以下、園館）が生涯学習の場として利用できるよう試みた。



平成 12 年度教育推進事業で作成した CD-ROM

ただし、これらのプログラムを実際に実施するためには、各園館の多様な条件を加味したアレンジが、まず必要である。さらに、その過程を経て発信されたプログラムを、学校サイドとの話し合いの上、指導要領および日程等、学校のニーズに合わせて練り直す必要もある。しかし、そのための具体的な手法や学校との連携法

についてはアドバイスに留まるのみで、今後の課題として残された。

教育プログラムを恒常的に実施しており、かつ、そのための人材のいる園館にとって、この教育モデルプログラムマニュアルは十分に利用可能だと考える。だが、教育プログラムの実施を希望しているが暗中模索の段階だという園館や、学校との連携を望むが、どこから手をつけていいのかわからないという園館にとっては、マニュアルの存在を実施実現にむすびつけるのは依然として困難であろうと想像する。

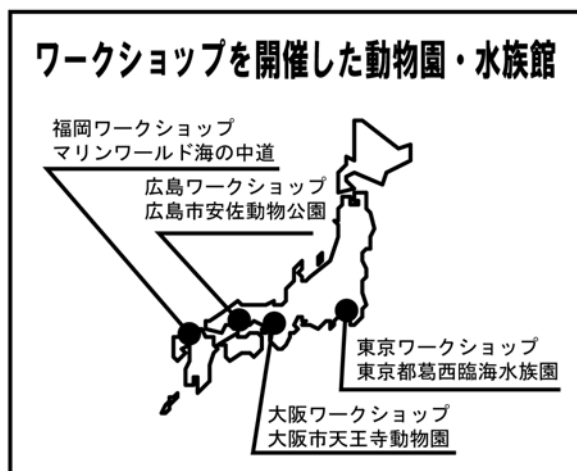
とはいえ、プログラムのアレンジや実施のための具体的な手法は、各園館によってそれぞれに違うものであり、マニュアルという形で明確にできるものではない。各園館



左：平成 12 年度作成 教育推進事業 CD-ROM
「動物園・水族館における生涯学習活動を充実させるための調査研究 -教育プログラム共有化のための実態調査-」
 中：平成 12 年度 教育推進事業 報告書
「動物園・水族館における生涯学習活動を充実させるための調査研究 報告書」
 右：平成 13 年度 教育推進事業 報告書
「新しい教育モデルプログラム ~動物園・水族館を利用した生涯学習の展開~」

の人材が、現実の状況に合わせ手さぐり感覚で進めていくしかないものでもある。大切なのは、実際にやってみることであり、やりながら考え、発展させていくことであろう。

そこで、開発したプログラムのうちの4つを選び、福岡：マリンワールド海の中道、広島：広島市安佐動物園、大阪：大阪市天王寺動物園、東京：東京都葛西臨海水族館の4園館の協力を得てワークショップ（以下、WS）を開催した。園館関係者、学校関係者および一般の希望者がプログラム実施者として参加し、実際に実施者の立場を体験しながら考えるというものである。4園館では、来園者に対するプログラム実施、モデルプログラムの評価・アレンジ・再評価、評価のための来園者実態調査、新しいプログラムの立案などが行なわれた。また、体験学習法や博学連携（博物館と学校が連携し、お互いの機能を補完しあいながら教育活動を進めること）などに関するセミナーも行われた。



他の園館が実施しているプログラムを単に見学するのではなく、実施者として参加し実際にやってみるという形式は、これまでにない画期的なものであった。参加者は、実際に活動する中で他の園館関係者や学校関係者、一般参加者と意見交換をすることで、自分の考えをさらに構築できたと思う。このWSが、教育プログラムの普及と定着の糸口として、また、学校関係者との連携の糸口になってくれることを切に願うものである。

最後になったが、WSの開催場所を提供して下さったマリンワールド海の中道、広島市安佐動物園、大阪市天王寺動物園、東京都葛西臨海水族館の各園館、また開催にご協力いただいた各氏に厚くお礼を申し上げます。